

夏は万物さかる季節。

真っ青な空の下、皓々とした光を仰ぐ向日葵は太陽の申し子。

山の稜線から積乱雲がたちのぼる。

蒼穹にそそり立つ雲の峰は真夏の象徴。

古い時代、人々は涼風を運んでくる夕立を待ち望んで一日に何度も空を見上げただろう。

雲の峰や入道雲の呼び名には、どこか自然への畏敬の念が込められている。



遷御の儀を間近に控えた平成五年の夏、伊勢神宮の最も神聖なる場所、御垣内の奥深くへとすすんだ。白布に包んだ純白の御白石を、真心を込めて神の元に納めた時の感動は何ものにも代えがたいものだった。あれから二十年の歳月が流れた。

平成二十五年、伊勢はまた熱い夏を迎えている。

八年の歳月をかけ三十にも及ぶ祭と行事が執り行われる遷宮。

その中で旧神領民が参加できる行事は二つ。

一つは、遷御の七年前から一次、二次と行われる御用材を運ぶ御木曳行事。

二つめは、遷御の年に行われる御白石持行事である。



御白石とは御正殿が建てられている内院の御敷地に敷き詰められている真っ白な石のことで、神殿のまわりの特に聖なる場所に敷かれている。

清流宮川流域で採取した純度の高い石英系白石で直径五～七センチ程度のもので定められ、ほんのりと温みを帯び、水晶の様に少し透明感のある石肌を持つのが特徴。

明治四十二年の遷宮に際し書かれた『神宮御料白石献納心得』の五条に次の様な規定がある。

「奉献白石ハ、清浄ノ場所ニ於テ採取シタル径一寸ヨリ二寸迄ノモノトス」

一方黒っぽい石は清石とよばれ五十鈴川や宮川で採取する。

「海石は死に石、川石は生き石」といわれるようにこれらの石は、すべすべと味気ない海石を避け、すべて川石が用いられる。

宮川の清流に磨かれた石は優しい丸みを帯びつつも多様な形状で趣のある風合いを見せており、神聖な社殿をさらに引き立たせている。

御白石を敷く理由のひとつとして、内院の雑草を除去し清浄な状態を保つ意味があったと考えられる。

「氏経卿神事記」寛正七年三月十三日条には次のように記されている。

「遷宮以後、此の沙汰今に無し。仍って草深く根堅く引れず、其の跡見苦しき間、能々白石を置かるべきの由、重ねて司中に相触れる。」
（『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』）

御白石持行事の始まりは遷宮関係の諸文献に多く記述が見られるが確定はできていない。

白石を置くことについての所見史料については伊勢市史（第二巻 中世編）が次のように触れている。

皇大神宮の第四十四式年遷宮の記録である「寛正三年造内宮記」寛正三年（1462）十二月二十七日条で「御内之清掃白石ヲ置事、宮司ノ勤也」とあって、瑞垣内の清掃と白石を置くことは大宮司の勤めであった（『神宮遷宮記』第四巻）。

また『神朝遺文』文政元年（1466）には「白石を内院に置か令む」と記されており、これらの文献から寛正三年の遷宮以前には白石が置かれていた事が理解できる。

神領民が御白石持行事に奉仕した記録は、江戸時代初期寛永六年（1629）第四十三式年遷宮のときのこと『寛永外宮正遷宮子良館記』寛永六年九月の条には「自十一日神民数百人、自宮川運砂石、敷新宮地、今日田中中世古持始之」とあり外宮の遷宮九月二十三日の直前、十二日前から宮川の白石が持ち運ばれた事や神領民が町単位で奉仕した事が読み取れる。

御木曳行事を終えた伊勢の各町では奉曳団解散後、新たに御白石持の奉献団が結成される。

そして御白石持行事の数年前から機会ある毎に清流宮川の川原に御白石を拾いに行く。

集められた御白石は川水で洗い清め樽に詰め、氏神の境内や公民館の清浄な一角に注連縄を張って本番まで奉安される。

神領民にとっての御白石持行事は“御白石を拾う”そこからすべてが始まるのである。

今回、御白石持に参加する奉獻団は全七十七団を数える。
それぞれの団が御白石拾いとは別に本番に向けての様々な準備を入念に進めていく。
奉曳車の調整を兼ねての町内曳、木遣り唄の練習などが市内のあちらこちらで見られる。
その中で日を増す毎に町中が絆を深め盛り上りを見せ、さらに伊勢がひとつになっていくのである。

奉獻の日を間近に控えた春の二見浦に木遣り唄が響く。
各奉獻団の“浜参宮”の初まりである。“浜参宮”とは海辺で行う禊のこと。
清き渚と称された二見浦は古来心身を清める禊の場であった。
その海辺に臨む二見興玉神社へ奉獻団全員が揃いの法被で参拝し、
無垢塩草（アマモ）の幣でお祓いを受ける。
無垢塩草とは夫婦岩の沖の海底に鎮まる興玉神石の周辺で採れる
海草のこと。
穢れのない無垢な状態に心身を清めるといわれている。
神聖な行事に臨むにあたり先立つ“浜参宮”は、神領民の誇りと
伝統を今日に伝えている。



—夫婦岩—

旧神領民は内宮、外宮のいずれかに属し、内宮領の奉獻団は川曳、外宮領の奉獻団は陸曳である。
今回は、内宮領十九団、外宮領五十八団が白石奉獻にのぞむ。
御木曳と異なり、内宮領の団も外宮領の団も両宮に奉獻する。
江戸時代中期までは御木曳と同様それぞれの宮に奉仕していたが白石不足に困窮を極める内宮領民に
対し外宮領民も自発的に奉仕するようになりそれが「信心持ち」と讃えられ両宮への奉仕は今日に至っ
ている。

『寛政正遷宮記附録』寛政元年八月二日の条には次のように記されている。

此頃、内宮へ白石持運び候様承り候。当宮（外宮）相済し候上、信心に持候儀格別の事にて、未だ
当方相済ずはかどり申さず候間、此上出精致し候様、御申触れ給ふべく候。

（『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』）

奉獻の日を迎え奉安されていた御白石は真新しい樽に入れられ、奉獻車に積まれる。
飾り付けられた奉獻車は各団の自慢。勇壮な木遣りに送られ揃いの法被で綱を曳く。

内宮への奉獻は川曳と陸曳がある。五十鈴川を遡る川曳は前回からで今年は内宮領十九団が奉獻する。
夏の日差しを受けてきらめく五十鈴川を、御白石を載せた木の櫓そりが白波を立てて進んでいく。
まるで古代絵巻の一場面を見るようだ。
木遣り衆の手に持つ采は川曳ならではの木製のもの。木遣り唄とホラ貝の音色が空高く響きわたる。
宇治橋手前で岸につけ内宮神域へと一気に引き込む。

また外宮領からの内宮奉獻陸曳きのルートは、浦田駐車場を出発しおはらい町を通るルートと、古市交差点が出発地点の二通りがある。

古市出発の団は、ゆるやかな坂道の続く旧伊勢街道を進み、急な下り坂の牛谷坂に入る。この難所を越え、おはらい町を通り抜け宇治橋前でエンヤ曳きで盛り上がる。

一方外宮への奉獻は陸曳のみ。

内宮領の奉獻団は、旧伊勢街道沿いにかかる小田橋を出発、川曳と同じ木橈に車輪をつけて曳く。

外宮領の奉獻団は浦口町を出発、旧参宮街道沿いを進んで行く。

道中は各団が最も盛り上がる見せ場である。

道唄を歌い各団自慢の木遣りに合わせ一致団結「エンヤエンヤ」と勇ましく綱を曳く。

綱は神聖なもの。曳き手が握る綱で力と心がひとつになる。

ブーン！！

高らかにワン鳴りを響かせながら最後の走り込みエンヤ曳で勢い良く北御門^{きたみかど}へ曳き入れる。

神域に運び込まれたお白石は一名一個手渡され、白布に包みお祓いを受けて御垣内へと進む。

檜の香り漂う輝くばかりの真新しい御正殿を仰ぎ見る。

そして御敷地にそっとお白石を置く…。神領民であるが故の幸せ…。

この感動はあの時と同じ。

二十年に一度のものである…。

すべての奉獻を終えるのは九月一日。

季節は夏から秋へ—。

第六十二回神宮式年遷宮「遷御の儀」は内宮平成二十五年十月二日、外宮十月五日に斎行される。

千三百年繰り返された歴史的瞬間へ——

二十年前、前回の遷宮のとき、
あなたは何をしていましたか…？

図書館だよりNo.137 増刊 平成 25(2013)年 7 月 1 日発行